

## 【論文】

# シンガポールの幼児教育課程編成における「地域資源利用」の構想と実際

滋賀短期大学 李 霞

## 1. はじめに

近年、諸外国では、幼児教育段階から国際意識の育成に加えて、身近な地域、社会での生活とのつながりに焦点を当てた教育活動が進められてきた。日本でも、2018年度から全面実施となった幼稚園教育要領においては、幼児の国際理解の意識の芽生えを培いながら、とりわけ地域、社会とのつながりを問う「社会に開かれた教育課程」の推進が重視されている<sup>1)</sup>。この「社会に開かれた教育課程」は、よりよい社会を創るために、教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、社会教育との連携を図ったりするなど、学校教育を社会と共有・連携することを目指すものである<sup>2)</sup>。

幼児教育課程の編成において、日本では、伝統文化や行事とともに、「地域の実態」を反映させる方針が戦後から一貫されてきた。近年、少子化、核家族化の進行に伴い、新たに家庭や地域とのつながりが重視されてきた。しかし一方で、その編成と実施は個々の幼児教育機関の努力に任されており、行政の支援体制が十分に整えられていない中、いかに持続的に地域の資源を開発・利用していくかを苦慮している幼児教育機関の実態がある<sup>3)</sup>。幼児教育現場を取り巻くこうした現状を打破し、「社会に開かれた教育課程」を推進するために、教育課程の編成及び実施において、子どもたちの姿や地域の現状に対する配慮、並びに地域の人的・物的資源をどう活用していくか、さらに行政としてどのようなサポートをしていくべきかなど、新しく動き出した日本の幼児教育改革に示唆を与えるべく、本論文では、アジアに関連する先進的な取り組みをいち早く進めてきたシンガポールに注目したい。

幼少期からの競争を意識せざるを得ない社会背景のもと、長い間、シンガポールの幼児教育は主に小学校の入学前準備段階と見なされ、教師中心による教え込みが主流であった。一方、近年、自ら考える力、探究的な学習能力、創造力、思考力などが育成すべき学力の国際的なスタンダードと認識されつつある中、シンガポールにおいても、幼児教育における子どもの主体的な学びの重要性が認識されるようになった。また、多民族国家でもあるため、シンガポールでは、1965年にマレーシアから独立して以降、幼児教育段階から一貫して民族の文化や地域での生活などを意識した教育活動が多彩に取り組みされてきた<sup>4)</sup>。こうした伝統が、今日の幼児教育の課程編成において守られ続けてきたことは、2012年に改訂された幼児教育のガイドラインである『Nurturing Early Learner—A Curriculum Framework For Kindergartens in Singapore (幼い学び手を育てる—シンガポールのキンダーガーデンのためのカリキュラムの枠組み)』(以下、2012年版『カリキュラム・フレームワーク』とする)からうかがえる。

これまで、シンガポールの幼児教育に関する先行研究においては、池田充裕や埋橋玲子らによるものが代表的である。池田は2000年代以降のシンガポールの幼児教育の役割が生涯学習の旅立ちに向けた準備段階として位置づけられ、教育内容と方法を生涯にわたる学習力や探究力、創造性の獲得を目指すものに改められていると結論づけた。他方、埋橋は今日のシンガポールの幼児教育はホリスティックな

発達を目指し、子どもの探求心を刺激する環境構成、アクティブ・ラーニングの誘発、子どもの学びのファシリテーターとしての保育者の役割が求められていると指摘している<sup>5</sup>。これらの先行研究は、今日のシンガポールの幼児教育を知るために大いなる示唆を与えるものの、主に政策的な改革という側面から言及されており、幼児教育現場での課程の編成や実施の実態が解明されていないことを指摘せざるを得ない。先行研究の不足を補うために、本論文では、シンガポールの幼児教育課程編成及び実施における「地域資源利用」に対する構想と実態の究明を試みる。そのために、教育課程政策についての分析に加えて、フィールド調査で得たデータを基に分析を進めていく。

第2節のシンガポールの教育概況に続き、第3節では、幼児教育の現状を見ていく。第4節では、教育課程政策において幼児教育課程編成及び実施における「地域資源利用」に対する構想を検討し、第5節では、行政側によるサポートという視点から「地域資源利用」に関するシンガポール政府の新たな動きを取り上げる。第6節では、幼児教育現場で見る「地域資源利用」の実態を分析し、第7節ではこれまでの分析を踏まえ、まとめと考察を行う。

## 2. シンガポールの教育概況

シンガポールは、独立当初から、経済発展における人材の重要性が認識され、「人材こそ最大の資源」という国家理念に基づいた教育制度が進められてきた。1960年代から1970年代まで、基礎教育の拡充や、学校や教員の確保、二言語教育（英語+母語）の導入など、国の公教育システムの確立のための一連の施策が進められ、今日の公教育制度が作り上げられた。その後の1980年代から1990年代までは、国の発展を牽引するエリートと国の発展の支えとなる技能を持った労働者を効率良く育成するために、徹底した能力主義のもと、小学校の早い段階で次の進学先を決める複線型の学校制度が導入された。さらに1997年以降は、知識基盤社会の到来に伴い、シンガポールの教育改革において新たに「生涯学習志向」という斬新な理念が掲げられ、教育制度やカリキュラム内容に柔軟性を持たせ、学校経営により自律性を与え、より多くの選択の機会を学習者に提供することなどの施策が講じられてきた<sup>6</sup>。

国の発展は人材の育成にあり、優秀な人材の確保を優先するシンガポールの教育に対する熱意は教育費の国家予算における割合からもうかがえる。シンガポールでは、2020年度一般会計における歳出予算のうち、教育関連予算は全体予算の15.9%を占めており、国防費（全体の18.0%）、保健関連予算（全体の16.0%、新型コロナウイルス対策費を含む）に次ぐ割合となっている<sup>7</sup>。日本の7.8%より遥かに多く<sup>8</sup>、教育大国と呼ばれるにふさわしい根拠となろう。

教育分野への積極的な投資の結果が表れたように、シンガポールの教育を受ける者の高い学力水準が諸外国の注目の的となった。その一例として、国際教育到達度評価学会（IEA）が実施した「国際数学・理科教育動向調査 TIMSS」を挙げたい。1995年から2019年までの間、シンガポールは数学・理科の学力ともに世界トップの成績をとり続けてきた<sup>9</sup>。また、経済協力開発機構（OECD）が実施した国際学習到達度調査 PISA 調査においても、シンガポールは、調査対象の3教科、すなわち、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーとも世界トップの成績を収め続けてきた<sup>10</sup>。

シンガポールの学校システムは、プレスクール（幼稚園、保育園など）1～6年間、プライマリースクール（初等教育、小学校）6年間、セカンダリースクール（中・高等学校）4～5年間、ポストセカンダリー（高等教育）で構成される。セカンダリースクールを終えて、十分に良い成績を収めた学生は、

2～3年間の大学進学準備コースに進み、大学進学するための学習を行う。一方、大学へ進学できるほどの十分な学力を身につけていない学生に対して、ポストセカンダリー段階では、職業能力を習得するための職業訓練専門学校や、職業に直結するような高度な専門知識を学べる実務教育を行う専門学校ポリテクニクに進む2～3年間のコースも用意されている。

2003年1月1日に初等教育の6年間を義務教育期間とする義務教育制度が導入されたが、学歴主義、教育熱心な国として知られているシンガポールについては、小学校就学率のデータはないものの、若年層（15-24歳）の識字率（英語か母語のどちらか）は99.8%となっていることから<sup>11</sup>、就学率は高いものと推測される。教育システムに言及する上で特筆すべきは、能力別クラス編成が初等教育という早い段階から導入されていることである。これは能力主義・実力主義を重んじるシンガポール政府が国家の中核を担うエリートを養成するために、幼少期から競争意識を植え付けるための教育課程であり、小学校卒業時点での学力レベルで進路が決まるという極端な選抜主義の色彩を伴うものである。なお、2020年10月現在、子どもたちにとって最初の能力別コース分けは小学校4年生の終わりに行われることとなっている。つまり、4年生の終わりに学校が独自に定めた基準に基づいてテストを行い、オリエンテーション段階（初等教育5～6年生）のための振り分けを行う。その後も初等学校卒業試験、中等学校卒業認定試験、ジュニアカレッジ等卒業時の認定試験の成績によって、子どもたちの進路がさらに振り分けられる。

このように、国民全体に教育の機会を平等に保障しようとしておらず、限られた資源を国の発展に貢献できる人材を育成するために、シンガポールでは自由競争原理に基づいた教育政策が徹底されてきたことは明らかである。政府が1983年の高学歴女性の出産奨励策を打ち出したことに見られるように、シンガポールでは優生学的な考え方を取り入れており、優れた能力をもつ者を教育上優遇する制度を充実させる方針をとっている<sup>12</sup>。

### 3. シンガポールにおける幼児教育の現状

シンガポールでは幼児教育機関として Kindergarten（以下、幼稚園とする）と Child Care Centres:（CCC、以下、保育園とする）がある。幼稚園はシンガポールの「教育法」によって「学校」という地位を与えられ、教育省（Ministry of Education:MOE）の管轄下に置かれている。幼稚園は主として3歳～5歳の幼児を対象に、Nursery（3歳児）、Kindergarten 1（4歳児、以下は K1 とする）、Kindergarten 2（5歳児、以下は K2 とする）のように3年間の教育プログラムを提供している。また、ほとんどの幼稚園は土日を除いた週5日制をとっており、一日3～4時間の教育時間を設け、午前・午後の二部制をとっている。学年歴は MOE が定め、毎年1月2日から始まり、10週間単位の4期制をとっている。保育園は「CCC 法」に定められた社会福祉機関と位置付けられ、社会家庭振興省（Ministry of Social and Family Development:MSF）が管轄官庁となっている。保育園は主に18ヶ月以上6歳以下の子どもを対象としていたが、近年、2ヶ月以上18ヶ月未満の子どもを受け入れるサービスも充実してきており、Infant（2歳未満）、Pre- Nursery（2～3歳）、Nursery（3歳児）、K1、K2 の5つの学年が設けられているところがほとんどである。保育サービスの時間は全日保育では約12時間、半日保育の場合は6時間程度である。

幼稚園と保育園が併存しており、それぞれ異なる省庁の管轄下に置かれていることは、日本の幼保二

元化に類似した構造となっている。ただ、日本と異なり、シンガポールでは、幼児教育が私事と見なされていたため、2013年まで公立の幼稚園や保育園がなく、すべては政府関連部署の許可を得た宗教団体や社会団体など民間によって運営されるものであった。また、日本の『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』のように、幼児教育に関する統一した手引きもなく、幼稚園や保育園の教育内容や方法については、各園独自の方針で展開される経緯があった。それに加えて、能力別クラス編成が初等教育という早い段階から導入されているため、幼少期からの競争を意識せざるを得ない社会的背景のもと、長い間、幼児教育は主に小学校の入学前準備段階と見なされ、教師中心の教え込み教育が主流であった<sup>13</sup>。

こうした状況は2000年代に入ると一変した。2000年に、MOEは「幼児教育の期待目標」を公布し、①何が正しく、何が間違っているのかを知る、②進んで他人と共有し、きまりを守って交流する、③他人との関係づくりができる、④好奇心をもち、探究できる、⑤理解しながら、聞いて、話しができる、⑥他人とともに快適で幸せに生活できる、⑦身体の協調と健康的な生活習慣を身につける、⑧家族、友人、教師、幼稚園を愛するなど8つの具体的な目標を示した<sup>14</sup>。この8つの目標からもうかがえるように、従来の知識習得のための詰め込み教育と一線を画し、新しい幼児教育は、これからの社会をより良く生きていく子どもの育成に着目しており、子ども一人一人の成長発達に焦点を当てるように舵が切られたのである。

その後、すべての子どもが平等に質の良い幼児教育を受けられることを目指して、2003年にMOEはシンガポールで初めてとなる幼児教育指導用のシラバス『Nurturing Early Learner—A Framework For A Kindergarten Curriculum in Singapore (幼い学び手を育てる—シンガポールのキンダーガーデンのためのカリキュラムの枠組み)』(以下、2003年版『カリキュラム・フレームワーク』とする)を公布し、「生涯にわたって、学習を発展させていくために、考えて学び、学び考えるような子どもたちを育てる」<sup>15</sup>ことを幼稚園教育の目標とした。MOEの動きに同調し、同年、MSFの前身であるMCYS(コミュニティ開発・青少年・スポーツ省(Ministry of Community Development, Youth and Sports))も保育活動の手引きとして『Good Practice Handbook for Child Care Centres』を刊行した。さらに、2012年になると、2003年版『カリキュラム・フレームワーク』が改訂され、新たに公布された2012年版『カリキュラム・フレームワーク』が、幼稚園及び保育園の3歳児以上に対して適用されることとなった。

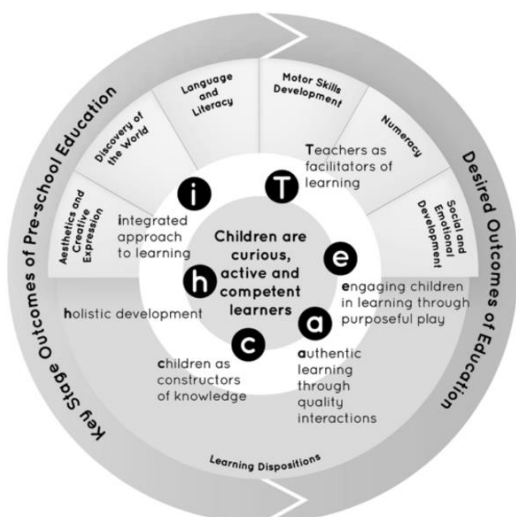
#### 4. 幼児教育課程政策における「地域資源利用」に対する構想

今日、シンガポールでは、幼児教育の目標が「Nurturing Early Learners (早期学習者の育成)」とされており<sup>16</sup>、これは、2003年に提起された「promote a love for learning (学習に対する熱意の育成)」<sup>17</sup>という目標を受け継ぎ、発展させたものである。つまり、熱意を持つことに留まらず、熱意が行動として現れること、さらに積極的に学習するための行動を自ら起こす主体性まで求められるようになったのである。また、2012年版『カリキュラム・フレームワーク』の冒頭には、「Our Belief and principles (私たちの信念と原則)」として「Children are Curious, Active and Competent Learners (子どもたちは好奇心が強く、活発で有能な学習者である)」と明記されており、教育の望ましい成果としては①A confident person (自信のある人)、②A self-directed learner (自発的な学習者)、③An active contributor (積極的な貢献者)、④A concerned citizen (社会に関心を示す市民)の育成の4つと定めている<sup>18</sup>。ま

た、質の高い幼稚園のカリキュラムで教育と学習を導く6つの原則を iTeach（この6つの原則の頭文字）として示されている（図1参照）。

図1からわかるように、iTeachの中核に据えているのは「children are curious, active and competent learners（子どもたちは好奇心が強く、活発で有能な学習者である）」というスタンスである。このスタンスのもと、教師が指導において守らなければならない原則は①Integrated approach to learning（学びへの統合的なアプローチ）、②Teachers as facilitators of learning（教師は学びのファシリテーターである）、③engaging children in learning through purposeful play（子どもは遊びを通して学ぶ）、④authentic learning through quality interactions（質の高い相互関係を通じた本質的な学びの実現）、⑤children as constructors of knowledge（子どもは知識の構築者である）、⑥holistic development（全面的な発達）となっている。さらに、幼児教育の目標を達成するために、教育内容は①Aesthetics and Creative Expression（美学と創造的表現）②Discovery of the World（世界の発見）③Language and Literacy（言語とリテラシー）④Motor Skills Development（運動技能の発達）⑤Numeracy（数量・計算能力）⑥Social and Emotional Development（社会的・情緒的発達）の6つと定められている<sup>19</sup>。

図1. iTeachの具体内容



出典：MOE、Singapore『Nurturing Early Learner—A Curriculum Framework For Kindergartens in Singapore』2012.

特に「Discovery of the World（世界の発見）」という領域は、幼児と周りの生活世界との関わりを重点的に取り扱っており、教育課程の実施においては地域資源の利用が重視されているため、本論文では、この領域に焦点を当て、分析を進めていきたい。

「Discovery of the World」という領域の学習においては、3つの目標が掲げられている。すなわち、①住んでいる世界に関心を示すこと、②簡単な調査を通じて、物事がなぜ起こるのか、どのように機能するのかを見つけること、③周りの世界に対して前向きな態度を育むこと、である。この学習分野に関連する必要な知識、スキルの習得、及び望ましい意欲態度の育成のために、教師の支援のもとで子どもの主体的な探求活動の領域をさらに①人と文化（家族や友人、コミュニティ、多文化主義、多様性<例：民族性、宗教、年齢、能力、職業>）②自然で構築された環境（植物、動物、天然資源<水、空気、岩>、材料の特性、乗り物、自然及び人工物）③場所とスペース（身近な環境<自宅、幼稚園、近所、建物、興味のある場所>国の他の部分、世界の他の部分、シンプルなマップ）④時間とイベント（時間の経過に伴い変化する概念<過去、現在、未来、昼、夜>、天気、ライフサイクル、成長、歴史及び現在の重要なイベントなど）⑤発明と技術（物事がどのように機能するか、情報通信技術、発明者と発明のプロセス）に分けられている。また、教師には、子どもの主体的な探求活動を援助する際に、子どもが自らの感覚や意識に従い、①さまざまなツール、機器、リソースを使用して、環境について調べること、②さまざまなリソースから情報を収集すること、③調査結果をさまざまな方法で記録し、表現する

こと、④個人的な経験と自らが学んだことについて話せるように<sup>20</sup>、有意義で関連性の高い内容を提供することが求められている。

このように、教育課程政策においては、「Discovery of the World」という領域における学習は、子どもの日常生活に密接に関連し、子どもたちが様々な道具や材料などを使って身近な環境について調べ、様々な情報源から情報を収集し、記録すること、自らの経験や学んだことについて発信するなど、単に環境に関する知識の習得だけではなく、環境や身近な世界を知った上で、自分なりに発信できるよう主体的で探究的な活動が重視されていることが明らかとなった。これは、日本の幼児教育における「地域資源」を取り入れた活動を行う際に、設定しがちな「住んでいる地域について関心を示す」<sup>21</sup>という教育目標より一歩進んだものといえよう。また、「Discovery of the World」という領域での探究活動における環境とは、日本でもなじみのある植物や動物、天然資源といった自然環境や、場所とスペースといった身近な環境だけではなく、子どもたちの家族や友人といった人的資源、多文化主義や多様性といった生活している社会に存在している文化、さらに、時間の経過に伴い変化する概念、天気、ライフサイクル、成長、歴史及び現在の重要なイベント、物事がどのように機能するかを理解するために情報通信技術、発明者と発明のプロセスを体験するなど、発明と技術に関するものも含まれていることが判明した。つまり、シンガポールの幼児教育における「地域資源」に対する捉え方は、日本の幼児教育に採り入れてきた「資源」という概念の中身をはるかに超えていることが明らかである。

## 5. 「地域資源」の活用における行政的支援

教育政策やカリキュラムの転換以外、政府主導の幼児教育改革は、関連部署の合併などの動きからも確認できる。シンガポールでは、2013年3月まで幼稚園はMOE、保育園はMSFが所管していたが、同年4月に、それぞれの関係部署が一つになった「早期幼児発達庁」(Early Childhood Development Agency : ECDA)が設置され、これにより7歳未満の子どもたちを対象に幼児教育を強化する司令塔が誕生した。

ECDAは、シンガポールの幼児セクターの規制及び開発機関であり、MOEとMSFが共同で監督する自律機関である。その主な役割は、すべての子どもが幼い頃から質の高いケアと教育を受けることができるように親、幼稚園や保育園に対する支援を行うことである。まず、親に対しては、幼稚園・保育園に関する情報や、幼児発達の科学と実践に関するリソースの提供、園を選ぶための検索ポータルサービス及び、補助金・財政援助に関するサービスの提供などを行っている。他方、園に対する支援としては、質の高い幼児教育施設の整備とプログラムの提供、カリキュラムの開発、専門家による子どもの教育に関する情報とサポートを行うプラットフォームの設置、幼児教育者の育成や継続的教育の実施などである。

ここでは、とりわけ、ECDAのイノベーションプロジェクトについて紹介しておきたい。イノベーションプロジェクトは、革新的な文化を育むことにより、幼児教育に関するプログラムと実践の質を向上させるために実施される補助金事業であり、幼稚園・保育園は、その目指す理想の実現のために先進的なアプローチや探求を行い、①子どもたちの学習体験を向上させること、②コミュニティの関与とホームセンターのパートナーシップを促進させること、③教育実践に対する継続的な改善を行うことを、目的としている。このイノベーションプロジェクトにはさらに幼稚園や保育園など幼児教育を行うセン

ターベースのイノベーションブランドプロジェクト、及びコミュニティパートナーシップを重視するイノベーションガイダンスプロジェクトの2つが含まれる。実施においては、センター、コミュニティ、及びより多くの保育園や幼稚園の教育実践改善に示唆を与えるため、ECDA によって指名されたモデル的な存在となるセンターの3つのイニシアチブが問われている。イノベーションプロジェクトの申請に関しては、ECDA に登録されているすべての幼稚園に申請資格が付与されている。保育園に関しては、申請時には ECDA によって発行されたライセンスの有効期間が 12 ヶ月以上あることが条件とされている。なお、交付についてはそれまで 3 つのイニシアチブのいずれにも申請したことのない、または助成金を受け取ったことのない園が優先される場合がある<sup>22</sup>。

このイノベーションプロジェクトについて、2019 年 2 月に、筆者が現地調査で得た情報を付け加えておきたい。当時、幼稚園 2 園及び保育園 1 園に対する訪問ができ、そのうち幼稚園 1 園は水族館との連携で、保育園は植物園との連携でイノベーションガイダンスプロジェクトに参加していた。両方とも、園の先生は定期的に子どもたちを連携先の水族館や植物園へ連れていき、そこで子どもたちが海洋動物や魚、植物について観察をしたり、観察したものを絵にして記録したりする活動が展開された。また、水族館や植物園のスタッフによる説明を受けたり、スタッフに質問したりすることで子どもたちは身近な動物や魚、植物について知ることができ、地球温暖化に伴う海水温度の上昇や海洋ゴミなどの汚染による海洋動物や魚、植物の瀕している危機的状況も知った。それだけではなく、活動を通して、子どもたちは水族館や植物園で働く人々についての認識も深め、キャリア教育にもつながった。さらに、子どもたちは自ら調べ、まとめた学習成果を園で発表したり、保護者を巻き込みバザーを開催し、得た売上金を水族館や植物園に寄付することで、動物や魚、植物の保護に活用したりする活動も展開された<sup>23</sup>。

ECDA のイノベーションプロジェクトに関する概要や、筆者の現地調査で判明した幼稚園や保育園の実際の取り組みから、幼児教育活動における地域資源の利用を、シンガポール政府が積極的に支援する立場をとっていることが明らかである。また、この地域資源とは、単なるコミュニティにある物的資源や場所としての空間的資源だけではなく、子どもの身近にいる家族や、友達、地域で生活している人々といった人的資源や文化も含まれているのである。何より ECDA のイノベーションプロジェクトは、補助金を提供することで、長いスパンにわたって、幼児教育機関とコミュニティパートナーである公共機関との間での連携活動を持続的に展開することを実現させ、学びの連続性を保障する点では重要な意義がある。学びの連続性を保障されているからこそ、子どもたちに自らを取り巻く身近な生活世界に興味関心を持たせることに留まらず、身近な生活世界に存在している問題を発見させること、そしてその解決方法について考えを深めさせることが可能になる。これは学習活動をより効果的なものにすることにつながるのである。この点は、個々の幼児教育機関の自主的な努力に任されているため、単発的な活動になりがちな日本における地域資源を採り入れた教育活動の実態と異なる点であり、日本に大いなる示唆を与えるものであろう。

## 6. 幼児教育現場で見る「地域資源利用」の実態

他方、「地域資源利用」の実態はどうなっているのかを究明するために、シンガポール B Kindergarten（以下 BK と略す）の 2019 年の事例を見ていきたい。

BK は、1986 年から MOE に登録されているキリスト教の幼稚園であり、二部制をとっている園であ

る。2020年3月現在、N1(2歳児)、N2(3歳児)、K1(4歳児)、K2(5歳児)の各3クラスで合計12クラスの180名の子どもが、12名の教師と4名のアシスタント講師の指導のもとで伸び伸びと園生活を楽しんでいる。BKは、キリスト教の環境のもとで子どもたちの学習を楽しく、刺激的で有意義なものにすることを目指している。子どもたちが神について学び、成長し、知ることの喜びを発見する手助けをするために、幼稚園が「愛」: 神の愛が教えられ、生きることを学ぶ場所、「レジリエンス」: 子どもが困難、挫折、失望、失敗から素早く回復する能力を身につける場所、「誠実さ」: 子どもが正直であり、揺らぐことのない強い道徳性を持つことを学ぶ場所、「好奇心」: 子どもが知り、発見し、学びたいという強い欲求を獲得する場所、という設定のもと、教育を提供している。カリキュラムについては、政府の定められている6つの領域に沿って、体験学習を中心としている。

「Discovery of the World」という領域の学習に注目すると、子どもたちが①自ら住んでいる世界に興味を示すこと、②周りの生活世界に対する前向きな姿勢を持つこと、③物事がどのように発生し、機能するかを調査すること、を到達目標と定められている。また、子どもたちの学習における教員の支援について、子どもたちに簡単な調査を通して、なぜ物事が起こるのか、物事がどのように機能するかを知る機会を提供すること、子どもたちが発達に必要なスキル(例えば観察、比較、分類、順序付け、質問、意思決定、題解決などの能力)を身につけるよう助けること、とされている。

この領域の学習をBKの2019年第2学期K1クラスの教学計画を通じて具体的にみていく。第2学期のK1クラスの教学計画においては、「Discovery of the World」という領域の学習を「My Community」という主題のもとで、6週目から10週目の5週間にわたって行っていた。学習目標の「周囲の世界に好奇心を示す(Display curiosity to the world around them)」に到達するために、「私たちのコミュニティには何があって何がないのか?(What are or are not in my community?)」「私たちのコミュニティには実際に何があるか(what is actually in my community)」「市場またはスーパーマーケット(Market or Supermarket)」「ホーカーセンター/コピタムまたはフードコート(Hawker Centre/Kopitam or FoodCourt)」といったテーマのもとで、学習活動が展開された。学習内容をさらに詳細に見ていくと「幼稚園に行く途中何が見えるか」「コミュニティまたは近所とは何か」「学校の近所/コミュニティにあるお店の名前を一つ言えるか」「幼稚園の所在地は言えるか」といった、子どもにとって身近にある場所についての確認を通して、子どもたちに自らが住んでいる生活世界へ関心を向かせるための内容が確認できる。さらに「ホーカーセンターとフードコートの違いは何か」「ホーカーセンターとフードコートのどちらが好き?なぜ?」など、子どもが周囲の世界に対する理解を深めるための、周囲の環境を観察・比較すること、その観察や比較の結果を表現するといった重要なプロセスを辿ることへと膨らませていくものも確認できる<sup>24</sup>。

表1は、この5週間にわたって行う「My Community」の学習の一部を示すものであり、「私たちのコミュニティには何があるのか?」という部分の教学計画である。到達目標として、「子どもたちは少なくとも2つの異なるタイプの店や施設の名前がわかる」と設定されている。学習において使われる資料や設備としては歌、ラップトップとBluetoothスピーカー、学校周辺の拡大ストリートマップにYouTubeという形で作成されているeBookも含まれる。

授業の流れとしては、まず始めに、歌の「コミュニティを作るのはあなたと私」を導入し、子どもたちに踊り歌いさせることで授業内容に対する興味関心を喚起した。歌の後、教師主導の質問の時間が設



けられ、「通学途中に何が見えるか?」「コミュニティや近隣とは?」「学校やコミュニティあるいは近隣にあるお店の名前を教えてください」「あなたの学校の前の大通りの名前を知っているか?」「あなたの学校やコミュニティ、あるいは近所にはどんなお店があるか?」「誰が何で働いているか?」「彼らは何をしているか?」などの質問を通して、子どもたちに周りのコミュニティに注意を向けさせ、身近にある店、大通りといった環境や、身近で働いている人々に注目し、認識や理解を深めさせるための時間となった。

表1. BAMK 「Discovery of the World」教学计划一例 2019K1 Term2-My Community	
<b>Learning Goal(s):</b>	<b>•Display curiosity to the world around them</b>
week:6	<p><b>Learning Goal(s) :</b> What Are or Not In My Community?</p> <p><b>Objective(s)/Learning Outcome(s):</b> Children will be able to name at least 2 different type of shops or facilities</p> <p><b>Resources/Materials:</b> 1, song-It's I it's you who build community 2.laptop and Bluetooth speaker 3.enlarged street map around school vicinity 4.eBook - Youtube <a href="https://www.youtube.com/watch?v=Ldsd5Q8KMo4">https://www.youtube.com/watch?v=Ldsd5Q8KMo4</a></p> <p><b>Tuning-in(10 minutes)</b> Song - It's I it's you who build community (i, T, e, c) Sing with actions <a href="https://www.youtube.com/watch?v=eLpWbvBBqq">https://www.youtube.com/watch?v=eLpWbvBBqq</a></p> <p><b>Lesson Development(20 minutes):</b> 1.Ask the children(i,T,e,c) •What do you see on your way to school? •What is community or neighbourhood? •Can you name a store located in the community/neighbourhood of your school? •Do you know the name of street of your school? •What other shops can you find in the community/neighbourhood of your school? •Who work in what? •What do they do? 2.Show video - My Little World <a href="http://www.youtube.com/watch?v=iwxkwPA8c68">http://www.youtube.com/watch?v=iwxkwPA8c68</a> (T,e,c) 3.Ask: What are the places you have learnt from the video?(T,e,c) 4.Ask: Which of these can be found in our community?(T,e)</p> <p><b>Closure(20 minutes):</b> 1.eBook - Franklin's Neighborhood by Sharon Jennings 2.Discuss children's responses (i,T,e,c)</p> <p><b>Evaluation:</b> Objective(s).met - ( )yes ( )no</p>

出典：BK2019年指導案

これらの質問による教師と子どもたちのやり取りを終えた後、「My Little World」というビデオが放映され、子どもたちにビデオを鑑賞させる時間となる。ビデオ鑑賞を終え、教師はさらに子どもたちに「ビデオからどんな場所を学んだか?」「これらの場所のどれが私たちのコミュニティで見つけることができるか?」などの問いかけを行い、これまでの学習内容の定着を図った。そして、授業の最後にeBook『シャロン・ジェニングスによるフランクリンの近所』が放映され、このeBookを観た後の子どもたちの意見や感想を発表させることで学習が締めくくられた。教学计划に示されている教師主導の学習活動に詰め込みの色彩が払拭できないものの、地域について子どもたちに知ってもらい、興味関心を持たせるために、学習内容に関連する歌をはじめ、eBook、ビデオ資料、YouTubeなど、学習内容を効果的に定着させるための資料や設備が充実していることに、シンガポール政府によるサポート体制がうかがえる。

ほかにも、BKは、「Discovery of the World」における「人と文化」という領域の学習にとりわけ力を入れている。この領域の学習の一環として、BKはシンガポールで生活している主な民族（中華系・マレー系・インド系）の記念日に合わせて、各民族の保護者の中から協力できる方を募り、子どもたちの前で伝統的な食べ物を作ってもらったり、子どもたちと一緒に試食したりする活動も多く取り入れている。また、「職業」というテーマでの学習において、保護者に講師として来園し、子どもたちに自らの

職業を紹介してもらい、子どもたちにインタビューさせる形を通して、子どもたちに様々な職業を知ってもらい、憧れを持つような取り組みも充実している<sup>25</sup>。

このように、ECDA のイノベーションプロジェクトと比べた時、確かに、幼児教育機関独自で展開されている BK の取り組みは、使える地域資源が幼稚園や幼稚園児にとって身近なコミュニティや友人、家族に制限されている。また、一つのテーマで展開される探究的な学習の期間も一学期と短いことが判明した。しかしながら、両者の共通点も明らかとなり、すなわち第一に、地域資源に対する捉え方については、物的・空間的なものだけではなく、人的資源や文化的な要素なども含まれていること。第二に、学習活動において、子どもに主体的・探究的な学習経験の獲得を重視していること。第三に、スパンの長さには違いがあったものの、学びの連続性を保障する視点があること、である。

## 7. まとめ及び考察

以上、幼児教育課程政策に対する分析、及びフィールド調査から、シンガポールでは、幼児教育課程編成及び実施においては「地域資源」の利用が大いに推奨されていることが判明した。なお、この「地域資源」とは、単なる地域にある物的資源・場所としての空間的資源だけではなく、人的資源や文化、時間やイベント、発明と技術なども広く含まれていることが日本の幼児教育で理解されている「地域資源」の概念を超えていることが明らかとなった。

確かに、BK の教学計画に示されている内容から、幼稚園は小学校の予備段階とされ、詰め込み教育が行われてきた痕跡が、今日においても残されているように感じるものの、「地域資源利用」という側面に注目した際には、以下で挙げているように、優れた部分も明らかとなった。

第一に、政府によるサポート体制が確立されていることである。シンガポールでは、幼児教育課程政策の転換だけではなく、ECDA の立ち上げや、イノベーションプロジェクトの導入など、管理体制や資金の面においても、「地域資源利用」における政府の支援が大きいものである。さらに、幼児は地域との関わりについて学ぶ活動の円滑な展開のために、各種設備を整備し、YouTube や eBook など資料の作成、データの共有についてもシンガポール政府の努力を無視できない。

第二に、コミュニティによる協力態勢が整えられていることである。先述したイノベーションガイダンスプロジェクトにおいては、幼児教育におけるコミュニティパートナーシップが重視されており、幼稚園や保育園と地域の連携先が良い関係を保っていることが明らかである。そのほかにも、BK の教学計画からうかがえるように、子どもたちは身近な店、スーパーマーケット、ホーカーセンター、フードコートに出かけて、見学したり、店の人に質問したりする機会が多く組み込まれている。このことから、幼稚園や保育園の普段の教育活動に地域社会は協力的であることがいえよう。

第三に、保護者は教育活動に参加し、協力する実態がある。フィールド調査で判明したように、水族館や植物園との連携のもとでイノベーションプロジェクトに参加している幼稚園・保育園の活動に、子どもたちの保護者も巻き込まれている。また、BK も、保護者が講師として来園し、子どもたちに授業をしたり、子どもたちと一緒に活動を行ったりするなど積極的に園の運営に関わっていることが明らかとなった。

第四に、教育活動の計画と実施においては学びの連続性を保障する視点がある。こうした視点があったからこそ、子どもに主体的・探究的な学習経験を確実に獲得させ、発達に必要なスキルを身につける

ことを可能にし、効果的な学習活動を実現させたといえよう。

シンガポールの幼児教育において「地域資源」を広くとらえている発想とともに、上述した四つのポイントは、「Discovery of the World」という領域の学習において、子どもたちが身近な環境について自ら観察し、実際に調査・比較・分析・発表するといった主体的な探究活動を後押しするものである。確かに、第二点のコミュニティによる協力態勢が整えられていること、及び第三点の保護者は教育活動に参加し、協力する実態があるに関しては、日本の幼児教育における類似の蓄積があることは否定できない。他方、本論文で取り扱ったシンガポールの事例は、行政の支援が十分に整えられていない中、単発的な学習活動に終始しがちな日本の「地域資源」活用の現状に一石を投じるものであり、今後、学びの連続性と学習成果の定着とともに、子どもたちが学習活動の主体となるための新たな視点を与えるものとなることを願いたい。とりわけ、第一点の政府によるサポート体制が確立されていること、及び第四点の教育活動の計画と実施において学びの連続性を保障する視点があることに関しては、今日の日本において足りない部分であり、地域社会とともに人材育成を担っていこうとする「社会に開かれた教育課程」の推進を目指す日本に、きわめて有意義な示唆を与える点といえよう。

## 参考文献・注

- 1 文部科学省「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/09/30/142169\\_2\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/09/30/142169_2_1.pdf) アクセス:2020/10/18
- 2 文部科学省「社会に開かれた教育課程（これからの教育課程の理念）」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/09/30/142169\\_2\\_4.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/09/30/142169_2_4.pdf) アクセス:2020/10/18
- 3 李霞「シンガポールにおける就学前教育改革の動向及び課題—教育政策の変遷に焦点を当てて—」  
『滋賀短期大学研究紀要』第44号、pp.85-102、2017。2015年から2020年までの間、筆者は滋賀県大津市・草津市・守山市・栗東市・野洲市の複数の幼稚園・保育園の園長先生へのインタビューから判明。
- 4 同上。
- 5 池田充裕「シンガポールにおける幼児教育・保育の成立過程とその現状：早期二言語教育の歴史と実践に着目して（記念講演）」『幼児教育史研究』第4巻、47-60頁、2009年。池田充裕「シンガポール—グローバル化対応の幼児教育—」、池田充裕・山田千田明編著『アジアの幼児教育：幼児教育の制度・カリキュラム・実践』160-181頁、2006年。高橋美由紀「シンガポールのバイリンガル教育とカリキュラム—幼稚園における英語と華語教育」『兵庫教育大学研究紀要（29）』71-84頁、2006年。埋橋玲子「シンガポールの幼児教育・保育(1)概況と背景」『同志社女子大学学術研究年報』(67)、57-67頁、2016年。埋橋玲子「シンガポールの幼児教育・保育(2)質の認証システム SPARK に注目して」（研究ノート）『同志社女子大学現代社会学会現代社会フォーラム』(13)、28-38頁、2017年。埋橋玲子「シンガポールの幼児教育・保育(3)カリキュラムの枠組みに注目して」『同志社女子大学学術研究年報』(68)、47-58頁、2017年。など。
- 6 埋橋玲子、前掲書、57-67頁、2016。
- 7 鈴庄美苗・森芳竜太「国際教育学会と教育先進国シンガポールから見る、危機の時代を生き抜く教員を支えるキーワード『CPD』とは」[https://www.murc.jp/report/rc/column/search\\_now/sn](https://www.murc.jp/report/rc/column/search_now/sn) アクセス:2020/10/20

- 8 『図表でみる教育』(Education at a Glance) 2020年版  
<https://project.nikkeibp.co.jp/pc/atcl/19/06/21/00003/091400129/>アクセス:2021/3/20
- 9 「日本の小中の理数、国際平均上回る 1位はシンガポール」『日本経済新聞』  
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQODG0425B0U0A201C2000000/2020/12/8> アクセス:2021/3/20
- 10 「PISA での日本の読解力が低下。ランキング上位シンガポールの英語教育の成功要因は？」  
<https://resemom.jp/article/2019/12/04/53677.html>2021/3/11.アクセス:2021/3/20
- 11 大和総研「ASEANにおける教育の充実と経済成長」  
[www.dir.co.jp/report/research/.../20140611\\_008636.pdf](http://www.dir.co.jp/report/research/.../20140611_008636.pdf) アクセス:2018/10/27.
- 12 Pennycook, A.(1994)The Cultural Politics of English as an International Language.New York:Routledge.
- 13 Sharp, P.J.(2000)“Features of Preschool Education in Singapore”In Tan-Niam, Carolyn and Quah, May Lin(eds.)Investing in our Future:the Early Years.Singapore:McGraw-Hill.
- 14 池田充裕、前掲書、161頁、2006年。
- 15 MOE、Singapore『Nurturing Early Learner—A Framework For A Kindergarten Curriculum in Singapore2003.
- 16 MOE、Singapore『Nurturing Early Learner—A Curriculum Framework For Kindergartens in Singapore』2012.
- 17 前掲書、MOE、Singapore、2003.
- 18 前掲書、MOE、Singapore、2012.
- 19 同上
- 20 同上
- 21 2015年から2020年にかけて、筆者は滋賀県大津市・草津市・守山市・栗東市・野洲市の複数の幼稚園・保育園の園長先生へのインタビューから判明。
- 22 <https://www.ecda.gov.sg/Educators/Pages/ECDA-Innovation-Projects-Grant.aspx> アクセス:2021/3/22
- 23 シンガポール現地での幼稚園・保育園におけるインタビュー、2019年2月28日
- 24 シンガポールB幼稚園の教学計画、2020年3月入手
- 25 シンガポールB幼稚園園長へのオンラインインタビュー、2020年3月5日

## Ideal and Practice of "Utilization of Local Resources" in Early Childhood Curriculum Development in Singapore

Xia LI

The Education Guideline for Kindergarten, which has been fully implemented since 2018 in Japan, places particular emphasis on the promotion of "Curriculum Open to Society" that questions the connection with the community and society. In order to give suggestions to Japan's newly-reformed early childhood education, this paper focuses on Singapore as an advanced case in Asia.

From the analysis of the early childhood curriculum policy and the field survey, we have followed the actual situation of "utilization of local resources" in the organization and implementation of the early childhood curriculum in Singapore.

As a result, it was found that "local resources" in early childhood education in Singapore include not only physical resources and spatial resources, but also human resources, culture, and events, etc.

In addition, there are four key factors to lead to the success of "utilization of local resources" in early childhood education were found in this paper. They were (1)a support system established by the government, (2)a cooperation system was built in the local community, (3)parents actually cooperate and participate in educational activities,(4)a perspective to ensure continuity of learning in planning and implementing educational activities.